

第1、 近況、雑感

1. 年末12月は、この歳になっても慌ただしく好きではない。特にクリスマスソングには胸が痛む。16歳のクリスマス、妹と弟にプレゼントを買うお金がなく、母親の着物を持出して質屋に怪しまれながら駄菓子求めて、枕元に置いた忘れられない記憶。世界中が核戦争に突入しそうな今日、ウクライナやハマスの子供たちは、“きよしこの夜”をどう聞いているのだろうか。
2. 少数与党になって、国会に議論が戻ってきたが、103万円問題なんか熱中している時か。ノーベル平和賞も我が国に届いたが、核戦争の危険は目前だ。専守防衛など能天気なことを論じている場合か。トランプ要注意で、誰が日本を守るのか。「日本合同委員会」という奇妙な密談組織にももっと目を向けて、平和への姿勢を正す必要があるようだ。
3. 昨年12月、遺族の依頼で札幌のGALLERY ESSEで開催した“上野憲男展”の好評を受けて、今年20日から来月10日まで京都の新しいアートギャラリー「十樹」で秀作35点の展示が始まった。10年前3回にわたって何必館・京都現代美術館を賑わせた大展示会を思い出し、期間中に何とか訪ねてみたい。
4. 8月に松岡さんが亡くなっていたことを最近知って驚いている。まだ80歳。もっと編集工学の話を聞きたかった。残念。寺山修司が、ほぼ無名な方たちを激賞して世に出したと言われる特別な3人。知の巨人立花隆、文化人類学の巨人山口昌男、そして編集工学の巨人松岡正剛。みんな逝ってしまった。比較の対象にもならないが、「火を創る少年」と書かれた88歳の老人は、資料館の『記念「燐寸」』をやっと作って未だウロウロしている。
5. 堀田力さんが亡くなった。ロッキード事件で田中角栄を追い詰めたカミソリ検事の異名で知られた方である。半世紀以上前、私が担当した刑事法廷の立会検事として、理路整然かつ人間くさい論告が記憶に残る。定年でほとんどの検事が弁護士(ヤメ検)になる道を選ばず、「さわやか福祉財団」を設立したことを知り、断られたが少々寄付をさせてもらった。心からご冥福をお祈りしたい。

6. ついでに書くと、「検察なめんなよ」と無罪事件で罵声をあびせた検事もいるようだが、大阪地検検事正（所長のこと）の、私の兄貴分みたいな名の人物も言語道断。批判の値もない俗物だが、立法機関に限らず、司法の世界にも似たような役人が少なくないと覚悟して生きなければならないのがこの国。どうか用心して健康第一で、新しい年をお迎えくださいますようお願いしています。なお郵便料金値上げに抗議して、年賀をとりやめいたします。

第2、 今月の報告

・「食の安全の落とし穴」(農業経営者 2024年12月号)

第3、 今月の本

- ・ 「書くことの不純」 (角幡唯介、中央公論新社 1,760円)
書くとはたったそれだけのことなのだ
- ・ 「言葉の現在地 2017-2024」 (関口裕士、北海道新聞社 1,980円)
忘れてはいけない
- ・ 「新型コロナウイルス感染症に対抗する栄養成分」
(斉藤嘉美、ペガサス 1,430円)
- ・ 「悩まない人の考え方」 (木下勝寿、ダイヤモンド社 1,870円)
1日1つインストールする一生悩まない最強スキル 30
- ・ 「老化は治療できるか」 (河合香織、文春新書 990円)
最先端科学でアンチエイジングの限界を超える

第4、 今月のことば

- 人生はクローズアップで見ると悲劇だが、ロングショットで見ると喜劇である。(チャールズ・チャップリン)
- 他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる。
(ユリック・バーン)
- アメリカよ、きみはますます落ちぶれた。
武器の谷のアメリカ、悲しいアメリカ。(寺山修司)